

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：中学生の「感情・態度」および「希望」との関係
Author(s)	篠原，弘章；勝俣，暎史
Citation	熊本大学教育学部紀要 人文科学，50：203-217
Issue date	2001-12-14
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/1174
Right	

熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性： 中学生の「感情・態度」および「希望」との関係

篠原 弘章・勝俣 暎史

Development and Validation of the KU Competence Scale:

in Relation to the Feeling-Attitude Scale and the Hope Scale in Junior High School Children

Hirofumi SHINOHARA and Teruchika KATSUMATA

(Received September 4, 2001)

The purpose of the present study was to confirm the reliability and validity of the KU Competence Scale. The subjects were 701 elementary school children. The alpha coefficients from the KU Competence Scale, Feeling-Attitude Scale and Hope Scale were respectively .882, .842 and .754. These alpha coefficients of reliability were very high. The five factor scores from the Competence Scale correlated positively to the scores of the Feeling-Attitude Scale and Hope Scale. Finally, many factor scores of competence were useful to predict six problem behaviours among children by multiple correlation analysis.

Key words : Competence scale, Feeling-Attitude Scale, Hope Scale, Reliability, Validity

問 題

子どもたちの問題行動が教育現場の問題のみならず社会問題となっている。

平成11年度の青少年白書によるといじめられたことがあると答えた者の割合は36.4%, また, 他人がいじめられているのを見たことがあると答えた割合は48.8%にもものぼる。また青少年問題審議会が平成10年6月に公表した『問題行動への対策を中心とした青少年の育成方策について(中間まとめ)』では, 問題行動を起こした子どもの意識等に見られる特徴の1つとして, そうした子どもは「自分自身に価値を見出し, 自尊の感情をもつことができないでいる」とされている。自尊感情は, 「家庭・学校・遊びなど存在価値を認められたり, 自己の成績・能力に自信を持つこと」と関連している。

ところで, Hildreth, H.M. (1946) は, 感情態度尺度を公表し, 勝俣・篠原は, これを翻訳して, 中学生や高校生について調査している(1979; 1980)。

Harter(1982) は, 児童の認知された有能感の下位因子として4因子(認知的コンピタンス, 社会的コンピタンス, 身体的コンピタンス, 総合的自己評価)を抽出し, 4つの下位尺度からなる児童用コンピタンス尺度(Perceived Competence Scale for Children)を開発している。勝俣(1992) は, Harterの「認知されたコンピタンス尺度」を心理療法において使用した経験から, 意志・意欲・時間管理などの他の因子(職業・経済的コンピタンス)を加える必要があることを指摘し, コンピタンスを5つの因子から構成するものを作成し, 後にこの職業・経済的コンピタンスを生活コンピタンス(survival competence)と改名した。また, 勝俣(2000) は, 問題行動をコンピタンスの観点から「問題行動は, コンピタンス, ないしコンピタンスの構成成分が有効・

適切に機能していない」とし、問題行動を有する個人ないし集団の行動がどのようなコンピタンス成分の機能不全から発現するかを把握する必要があると述べている。

そこで本研究では、先の勝俣・篠原（2000）、篠原・勝俣（2000）の小学生に行った児童生徒用コンピタンス尺度（熊大式：児童生徒自己評価用－S型）を、中学生に適用しその信頼性と妥当性を検討するものである。

また、本研究では前研究と同様に、Faberの「希望は、有能感の水準と正比例し、脅威の水準と反比例する」という希望の公式と、知性・情動・意志の三側面から有能感、感情・態度、希望の関係を検討する。研究仮説は以下のとおりである。

- 1) コンピタンス得点は、ヒルドレス感情・態度尺度と正の関係があるだろう。
- 2) コンピタンス得点は、スナイダー希望尺度と正の関係があるだろう
- 3) コンピタンス得点は、児童の問題行動の経験と負の関係があるだろう。

方 法

1. 調査対象

熊本市内の二つの中学校の1年生241名（男子112名、女子129名）、2年生232名（男子126名、女子106名）、3年生228名（男子114名、女子114名）、合計701名（男子352名、女子349名）を対象に質問紙調査を実施した。

2. 調査期日および方法

1999年7月1日から7月20日にかけて、質問紙調査法により集団実施。無記名式（学校、学年、性別）とし、調査用紙の配分および回収は各担任教師に依頼した。

3. 質問紙の構成

1) ヒルドレス感情・態度尺度

ヒルドレス感情・態度尺度は、①感情因子4項目（気分2項目、活力、将来の見通し）、②態度因子4項目（判断力、勉強、仕事意欲、対人関係）、計8項目から構成される。児童の日常の感情・態度を把握するために、各項目について、8～10個の選択肢をもうけ、その中から1つだけを選択させた。具体的な設問と選択肢は以下の通り。なお、実際の調査票には漢字部分にはすべてふりがなをつけた。

F 1. あなたの気持ちにいちばん近いと思う番号を1つ○で囲んでください。

1. 私はこの上もなく気持（気分）がよい。最高だ。2. たいへん気持（気分）がよい。3. たいていの場合、気持（気分）がよい。4. だいたいよい。5. ふつうなみである。6. そんなに悪くはない。7. ややわるい。8. かなり悪い。9. 気持が沈みきっている。10. 死んでしまいたい（死にたい）。

F 2. あなたの気持ちにいちばん近いと思う番号を1つ○で囲んでください。

1. 今までこれ以上、気持（気分）がよいことはなかった。2. よい。3. たいていの場合、か

なりよい。4. 時たま、うち沈むこともあるが、たいていよい。5. ふつう。6. よくもないが、まあである。7. やっていきのがせいいっぱいである。8. 不愉快な気持（気分）である。9. いつもまったくみじめな気持（気分）である。10. これ以上、気持（気分）の悪いことはない。最低だ。

E3. あなたの気持ちにいちばん近いと思うものに○印をつけてください。

1. 活気に満ちあふれている。2. 活気にみちている。3. 少々のことでは疲れない。4. ふつう以上に元気である。5. かなり元気である。6.それほど元気ではないが、どうにかやっていける。7. あまり元気であるとは思わない。8. たいてい疲れている。9. ひどくつかれている。10. まったく疲れはてている。

E4. あなたの気持ちにいちばん近いと思うものに○印をつけてください。

1. いろいろなことに熱中しきっている。2. なにごともうまくいっている。3. 将来の見通しはあまり悪いとはおもわない。4. とくに悪くもない。5. 時たま落胆することがある。6. 将来が不安である。7. 不安定である。8. すべてのことが不満である。9. これ以上悪くなったら耐えられない。10. 絶望的だ。

M5. 現在のあなたをもっともよくあらわしていると思うものを○でかこんでください。

1. 私は何の苦もなく、いろいろな状況を判断することができる。2. 私は困難な状況に直面しても、冷静に対処できる。3. 私の判断はいつも適切だと思う。4. ふつう判断するのにあまり困らない。5. 私は判断するのがかなりにぶいように思う。6. 私は自分のことがいつも気になっている。7. 私はとほうにくれて、自分が何をしているのかわからなくなることがよくある。8. 私は精神的に混乱しきっていて、どうしたらよいのかわからない。

W6. 現在のあなたをもっともよくあらわしていると思うものを○でかこんでください。

1. 私は仕事がちょっとばかり長引いても、その仕事をやりとげることがすきだ。2. 私はその仕事がたとえ好きでなくても、ふつうそれを徹底的にやる。3. 私はたとえ完全でなくても自分で満足できるような仕事をしようとする。4. 私はたいていの仕事に十分興味をもつことができ、それらをかなり適切にやっていける。5. 私はたいていの仕事を人並みにやってゆける。6. 私はのんびり構えているけれども、なんとか仕事はやりとげる。7. 私は仕事はやりとげるけれども、無理してまではやらない。8. 私は仕事をやる気はあるが、どんな仕事をするにも長く続けられず、ときどき休まなければならない。9. 私は気がすすまないとしても仕事をする事ができない。10. 私はどんな仕事でも長くすればするほどますますいやになってくる。

P7. あなたの気持ちにいちばん近いと思うものに○印をつけてください。

1. 私はだれともなかよくくらしている。2. 私はたいていの人が好きだ。3. いっぱんに私は他の人に好意的である。4. 私は好きな人も嫌いな人もある。5. 私はたいていの人には無関心である。6. 私は他の人とあまりなかよくくさせない。7. 私はたいていの人にはいらだちを感じる。8. 私は他の人のすること、為すことをがまんできない。9. 私はだれもかも、何もかもが腹立たしい。

P8. あなたの気持ちにいちばん近いと思うものに○印をつけてください。

1. 私はだれとでも容易になかよくくらしている。2. 私はたいていの人となかよくくらしている。3. 私はたいてい他の人に協調的だと思う。4. 私はいいと思えばつきあうし、いやだと思えばつきあわない。5. 私は他の人が自分のことをどう考えているかについて、かなり気になる。6. 私がすることや、言うことにだれも注意をはらってくれない。7. だれも私を理解してくれない。8. たいてい私は誰にでも腹をたてている。9. 私はこの世がいやだ。

2) 有能感尺度

有能感の測定は、勝俣（1997）によるコンピタンス尺度を小学生・中学生用に改良したS型：児童生徒自己評価版を用いた。この尺度は、児童が自分のコンピタンス（能力、有能さ）を把握するために、①認知的コンピタンス7項目、②身体的コンピタンス7項目、③社会的コンピタンス7項目、④生活コンピタンス7項目、⑤総合的自己評価コンピタンス7項目、合計35項目から構成されている各項目の選択肢は、肯定的なものに「よくにている（4点）」、「だいたいにている（3点）」、否定的なものに「だいたいにている（2点）」、「よくにている（1点）」という、4段階の選択肢を設け、その中から1つを選択させた。項目を要因ごとに示すと以下の通りである。

I. 認知的コンピタンス

Q1 自分の考えを言葉で表現できる人もいます。Q2 自分の考えを決められる人もいます。Q11 集中力のある人もいます。Q16 いろいろな考え方ができる人もいます。Q21 記憶力のよい人もいます。Q26 勉強ができる人もいます。Q31 頭がよいと思っている人もいます。

II. 身体的コンピタンス

Q2 体力のある人もいます。Q7 運動が得意な人もいます。Q12 からだがじょうぶな人もいます。Q17 活動的な（きびきびした）人もいます。Q22 表情の豊かな人もいます。Q27 よく眠れる人もいます。Q32 リラックスした人もいます。

III. 社会的コンピタンス

Q3 ざっくばらんな人もいます。Q8 人の好き嫌いのない人もいます。Q13 すなおな（協調的な）人もいます。Q18 社交的な人もいます。Q23 仲間の多い人もいます。Q28 思いやりのある人もいます。Q33 人から好かれやすい人もいます。

IV. 生活的コンピタンス

Q4 目標のある人もいます。Q9 勤勉な（まじめな）人もいます。Q14 意欲のある人もいます。Q19 がまん強い人もいます。Q24（生活が）規則正しい人もいます。Q29 責任感のある人もいます。Q34 意志が強い人もいます。

V. 総合的自己評価コンピタンス

Q5 希望のある人もいます。Q10 明るい人もいます。Q15 自信のある人もいます。Q20 今の自分に満足している人もいます。Q25 気持ちの安定した人もいます。Q30 自分が好きな人もいます。Q35 自分は必要とされていると感じている人もいます。

3) スナイダー希望尺度（SHS）

児童が日常生活の中で希望をもって生活しているかどうかを知るために、Snyderら（1991）によって作成された希望尺度を用いた。この尺度は、①通路因子4項目（未来の目標に向かって歩むための方法を見出そうとする力があるか）、②発動性因子4項目（未来に向かって歩もうとする意欲があるか）、③緩衝項目4項目、合計12項目から構成されており、4つの選択肢（1＝まったくそうではない、2＝あまりそうではない、3＝だいたいそうだ、4＝まったくそうだ）の中から1つだけ選択させた。データ収集後の実際の分析は、緩衝項目の4項目（*印をつけた下記のQ3, 5, 7, 11）を除いた8項目でおこなった。具体的な設問は以下の通りである。

Q1 私は困難に直面したときでも、いろいろな解決方法を考えることができる。

Q2 私は自分のたてた目標を達成するために一生懸命努力している。

Q3* 私はいつも疲れている。

Q4 どんな問題でもいろいろな解決法がある。

Q5* 私は議論になるとすぐ負けてしまう。

Q6 私は自分の人生にとっていちばん大事なものを手に入れるために、いろいろな方法を考えることができる。

Q7* 私は健康のことが気になっている。

Q8 他の人々が気落ちしているときでも、私は問題を解決するための方法を見いだせると思う。

Q9 私が今までに経験してきたことは、私の未来（将来）のために役立っている。

Q10 私の人生はかなりうまく行っている。

Q11* 私はいつも何かに悩んでいる。

Q12 私は自分のたてた目標は達成する。

4) 問題行動の調査項目

これまでどのような問題に直面してきたかを調べるために6つの項目を設けた。

①今までに、病気やけが、または家庭の都合以外の理由で、1週間以上続けて学校を休んだことがありますか。

②今までに、精神的、肉体的に耐えられないほどのひどい「いじめ」を受けたことがありますか。

③今までに、ひどくはないが「いじめ」を受けたことがありますか。

④今までに、誰かをいじめたことがありますか。

⑤今までに、「死にたい」とか「自殺したい」と思ったことがありますか。

⑥今までに、ムシャクシャして人の物を壊したり、他人の自転車やバイクを乗り回したり、スーパーなどからお金を払わないで物を持ち出したり、夜間外出や無断で外泊したりしたことがありますか。

以上6項目について、それぞれ「1. 今の学年になってからある」、「2. 前の学年の時にあった（今はない）」、「3. 2年以上前にあった（今はない）」、「4. 今まで一度もない」の4個の選択肢を設け、その中からあてはまるものすべてに印をつけさせた。

結果および考察

以下の分析では、有能感尺度35項目、感情・態度尺度8項目、希望尺度12尺度の計55項目すべてに完全回答した被験者データについて検討した。その結果、有効被験者数は、1年生241名（男子112名、女子129名）、2年生232名（男子126名、女子106名）、3年生228名（男子114名、女子114名）の合計701名（男子352名、女子349名）となった。なお、問題行動6項目の選択肢は0、1の二進データなので、被験者の減少とは無関係である。

1. 有能感尺度

熊大式コンピタンス尺度（S型）の35項目は、5要因から構成されている。まず、完全回答の701人のデータに基づいて、35項目間のピアソンの相関行列を算出した。次に設定した5つの要因ごとに項目をグループ指定した。即ち、あらかじめ設定されている5つの要因について、Ⅰ認知的コンピタンス、Ⅱ身体的コンピタンス、Ⅲ社会的コンピタンス、Ⅳ生活的コンピタンス、Ⅴ総合的自己評価コンピタンスごとにグループ指定し、さらに35項目全体を1つのグループに指定

Tabl 1 中学生の有能感尺度 35 項目のグループ主軸法による因子負荷量

No.	項目の主旨	グループ因子					全体
		1	2	3	4	5	
26	勉強ができる	.742	.182	.215	.370	.324	.472
31	頭がよい	.635	.116	.167	.258	.290	.376
21	記憶力がよい	.630	.135	.175	.233	.191	.348
1	自分の考えを言葉で表現できる	.584	.196	.272	.266	.338	.469
11	集中力がある	.562	.227	.188	.450	.303	.453
16	いろいろな考えができる	.522	.255	.279	.358	.278	.469
6	自分の考えを決められる	.514	.262	.244	.351	.331	.480
2	体力がある	.177	.822	.271	.282	.256	.430
7	運動がとくいである	.182	.798	.258	.272	.256	.420
17	活動的である	.394	.603	.366	.452	.350	.569
12	体がじょうぶである	.093	.576	.192	.214	.260	.332
22	表情が豊かである	.219	.424	.476	.259	.412	.505
27	よく眠れる	.057	.248	.156	.111	.215	.215
32	リラックスしている	.188	.151	.148	.139	.222	.265
23	仲間が多い	.220	.367	.743	.248	.449	.532
33	人から好かれやすい	.257	.282	.707	.273	.466	.522
18	社交的である	.259	.392	.601	.237	.356	.503
28	思いやりがある	.165	.173	.498	.339	.249	.362
13	すなお（協調的）である	.225	.115	.459	.302	.266	.353
8	人の好き嫌いがなく	.068	.126	.363	.171	.201	.233
3	ざっくばらんである	.142	.187	.350	.086	.229	.294
29	責任感があ	.358	.308	.293	.634	.275	.484
34	意思が強い	.391	.312	.327	.628	.371	.551
19	がまん強い	.239	.270	.262	.582	.279	.413
9	勤勉（まじめ）である	.375	.147	.151	.558	.196	.345
14	意欲がある	.280	.250	.287	.530	.324	.449
4	目標がある	.215	.235	.201	.520	.326	.407
24	（生活が）規則正しい	.185	.172	.125	.403	.211	.273
30	自分が好きである	.279	.283	.362	.300	.732	.535
20	今の自分に満足している	.290	.292	.376	.297	.708	.532
35	自分は必要とされていると感じる	.372	.256	.460	.372	.691	.591
25	気持ちが安定している	.245	.260	.331	.327	.619	.481
15	自信がある	.479	.336	.349	.383	.618	.606
10	明るい	.203	.396	.512	.229	.503	.518
5	希望がある	.234	.202	.258	.353	.456	.420
因子分散		2.544	2.272	2.125	2.160	2.740	6.960
寄与率		36.3	45.4	30.4	30.9	45.7	19.9
アルファ係数		.708	.653	.618	.626	.741	.882
有能感グループ主軸因子間の相関		1	2	3	4	5	T
1. 認知的コンピタンス		1.000					
2. 身体的コンピタンス		.316	1.000				
3. 社会的コンピタンス		.358	.450	1.000			
4. 生活的コンピタンス		.535	.442	.433	1.000		
5. 総合的自己評価コンピタンス		.483	.457	.600	.512	1.000	
6. 全 体		.718	.673	.751	.761	.840	1.000

して、グループ主軸法による因子分析を行った。結果を Table 1 の上部に示した。Table 1 では、因子負荷量の絶対値が .450 以上のものを太字で示した。また、グループ主軸因子間の相関を Table 1 の下部に示した。

Table 1 の中部に示した項目の内容的一貫性を示す信頼性であるアルファ係数は .618 ~ .741 を示し、各因子の信頼性は幾分低いが良好といえる。とくに、総合的自己評価コンピタンス因子と認知的自己評価コンピタンス因子は、いずれも .741 ~ .708 の α 係数を示し、他のコンピタンス因子よりも相対的に内的一貫性が高い。これは先の篠原ら (2000) の小学生での因子分析結果と同様である。他の 3 つの因子では、身体的コンピタンス (.653)、社会的コンピタンス (.618)、生活的コンピタンス (.626) の 3 つが .600 代の α 係数を示し、内的一貫性がやや低い、十分使用には耐える高さの信頼係数であると判断してもよい。ここで、身体的コンピタンスの α 係数が低いのは、Q32 リラックスしている (.151)、Q27 よく眠れる (.248) の 2 項目に起因し、また、社会的コンピタンスの α 係数が低いのは、Q3 ざっくばらんである (.350)、人の好き嫌いが無い (.363) の 2 項目が指定したグループの因子負荷量が小さいためである。このことは、Table 1 の右端に示した全 35 項目を 1 つの群に指定したときの因子負荷量が .300 に達していないことにも表れている。これらの 4 項目以外はすべて指定したグループ内で .400 以上の高い因子負荷量を示した。また 35 項目全体としての α 係数は .882 と非常に高いので、コンピタンス尺度は全体として内的一貫性による信頼性が高く妥当な項目構成であったといえる。このことは、全体のグループ主軸因子と 5 つの下位コンピタンス因子が .673 ~ .840 の高い相関を示したことからも裏づけられる。

また、グループ因子間の内部相関は、.316 ~ .600 という比較的高い相互相関がみられる。このような内部相関はあまり高いと同じものを測っていることになり、低くても困るが内部相関としてはある程度の高さを示している、これらの項目が別な側面も測定していることを意味している、この程度の高さが妥当ということになろう。従って、本コンピタンス尺度は、5 つのいくぶん異質な側面のコンピタンスを測定しながら、全体として関連性のあるコンピタンスを測定しているといえる。

2. 感情・態度尺度の因子分析

ここでも回答に不備のない 701 人を対象に、感情・態度尺度 8 項目間のピアソンの相関係数を算出した。この内容的一貫性を検討するため、同様にグループ主軸法を用いて、あらかじめ設定されている 2 要因 (I 感情, II 態度) の項目群をグループ指定し因子分析を行った。その結果を Table 2 に示す。ここでは、因子負荷量の絶対値が .600 以上となる項目を太字で記した。また、グループ因子間の相関は Table 2 の下部に示した。

Table 2 の中段に示した第 I と第 II 因子のアルファ係数は、それぞれ .847, .674 という値を示し、各因子の信頼性は比較的高く、とくに感情因子で内的一貫性が高い。

第 I 因子には、Q1 感情状態 (.884)、Q2 最高の感情状態 (.873)、Q3 心的活力 (.803)、Q4 将来の見通し (.743) という感情要因尺度の 4 項目すべてが .743 以上の高い因子負荷量を示した。

第 II 因子にも、態度要因としてあらかじめ設定した 4 項目、すなわち、Q8 人間関係 (.787)、Q7 人に対する態度 (.776)、Q5 精神状態 (.620)、Q6 勉強に対する態度 (.644) の 4 項目がすべて高い負荷を示し、信頼性のある尺度として裏付けられた。

しかし、感情因子と態度因子は .580 という相関が見られ、類似部分がかなり多い。8 項目全体

Tabl 2 中学生の感情・態度尺度8項目のグループ主軸法による因子負荷量

		グループ因子		
No.	項目の主旨	1	2	全体
感情因子				
1	感情状態について	.884	.503	.818
2	最高の感情状態について	.873	.475	.797
3	心的活力について	.803	.468	.750
4	将来の見通しについて	.743	.477	.719
態度因子				
8	人間関係について	.428	.787	.631
7	人に対する態度について	.399	.776	.604
6	勉強に対する態度について	.399	.644	.562
5	精神状態について	.433	.620	.581
因子分散		2.740	2.021	3.799
寄与率（％）		68.5	50.5	47.5
アルファ係数		.847	.674	.842
グループ主軸因子間の相関				
1. 感情因子		1.000		
2. 態度因子		.580	1.000	
3. 全 体		.932	.835	1.000

Tabl 3 中学生の希望尺度8項目のグループ主軸法による因子負荷量

No	項目の主旨	グループ因子		
		1	2	全体
通路因子				
1	困難に直面した時でも解決法を考えられる	.770	.317	.621
8	どんな時でも、問題の解決法を見いだせる	.715	.301	.583
4	どんな問題でもいろいろな解決法がある	.674	.306	.564
6	目標達成のための方法を考えることができる	.644	.386	.613
発動性因子				
12	自分で立てた目標は達成する	.343	.761	.650
2	目標達成のために一生懸命に努力	.310	.761	.624
10	自分の人生はうまくいっている	.358	.667	.612
9	今までの経験は自分の将来のために役立つ	.315	.657	.576
	因子分散	1.972	2.034	2.938
	寄与率	49.3	50.8	36.7
	アルファ係数	.657	.678	.754
グループ主軸因子間の相関				
	1. 通路因子	1.000		
	2. 発動性因子	.463	1.000	
	3. 全 体	.846	.863	1.000

を1つのグループ指定したときの因子負荷量を右端に「全体」として示した。それによれば、負荷量は、.562～.818の高い負荷量を示し、 α 係数も.842と高い。また、全体の因子と感情因子は.932、態度因子は.835と高い相関を示した。従って、感情・態度尺度は十分高い内的一貫性があるといえる。

これらの因子負荷量は、先の小学生の結果と比べると Q5 精神状態の項目以外はすべて数値の上では中学生の因子負荷量が若干高い数値を示した。

3. 希望尺度の因子分析

希望尺度においても 701 人の被験者を対象に、希望尺度 8 項目の内容的一貫性を検討するため、グループ主軸法によって、あらかじめ設定されている 2 要因（Ⅰ 通路，Ⅱ 発動性）について各項目をグループ指定し因子分析を行った。その結果を Table 3 に示す。Table 3 には、因子負荷量の絶対値が .500 以上となる項目を太字で記した。また、グループ主軸因子間の相関を Table 3 の最下部に示した。

Table 3 の中段に示した第Ⅰと第Ⅱ因子のアルファ係数をみると、それぞれ .657、.678 という値を示し、各因子の内的一貫性による信頼性は、比較的高いと判断される。

第Ⅰ因子には通路（pathway）の 4 項目、すなわち、Q1 困難に直面したときでも、いろいろな解決方法を考えることができる（.770）、Q8 他の人々が気落ちしているときでも、問題解決の方法を見い出せる（.715）、Q4 どんな問題でもいろいろな解決法がある（.674）、Q6 自分の人生にとって大事なものを手に入れるために、いろいろな方法を考えることができる（.644）というすべての項目が該当した。

第Ⅱ因子には、「発動性 agency」の 4 項目、すなわち、Q12 自分のたてた目標は達成する（.761）、Q2 目標達成に一生懸命努力（.761）、Q10 私の人生はうまくいっている（.667）、Q9 今まで経験してきたことは、未来（将来）に役立っている（.657）というすべての項目が該当した。

ここでも、8 項目全体を 1 つのグループに指定したときの因子負荷量を右端に「全体」として示した。それによれば、負荷量は、.576～.650 の比較的高い負荷量を示し、 α 係数は.754 が得られた。また、全体の因子と通路因子は.846、発動性因子は.863 と高い因子間の相関を示した。従って、希望尺度も十分な内的一貫性があるといえる。

4. 3 つの尺度間の関係

〈有能感尺度と感情・態度尺度との関係〉

コンピタンス得点は、ヒルドレス感情・態度尺度と正の関係があるだろうという仮説のもとに、有能感尺度の 5 要因と感情・態度尺度との相関を検討した（Table 4）。有能感の 5 つの各要因得点と感情・態度の 4 つの要因得点とは、認知的コンピタンス、身体的コンピタンス、社会的コンピタンス、生活的コンピタンス、総合的自己評価コンピタンスとはいずれも有意な .141～.523 の相関を示した。とくに総合的自己評価と気分、熱中の下位要因がそれぞれ .523 と .496 という高い相関を示した。他方 協調要因と 5 つのコンピタンス要因とは他のコンピタンス要因での相関よりも相対的に低い .141～.381 の相関を示した。

これらのことから、感情・態度要因と各有能感要因との間には強い正の相関があり、全体として有能感が高ければ、感情・態度も望ましい方向にあるといえる。

〈有能感尺度と希望尺度との関係〉

コンピタンス得点は、スナイダー希望尺度と正の関係があるだろうという仮説のもとに、有能感尺度の5要因と希望尺度得点との相関を検討した。

有能感の5つの各要因得点、すなわち認知的コンピタンス、身体的コンピタンス、社会的コンピタンス、生活的コンピタンス、総合的自己評価コンピタンスの順に、希望尺度の下位要因である通路要因とは、.407, .267, .359, .426, .409 とやや低い相関であった。他方、発動性要因とは、順に.440, .327, .338, .565, .509の相関であった。これらの結果から、希望尺度の各要因と有能感との間にも強い正の相関があり、有能感が高ければ、希望も高い。つまり、Faberの「希望は、有能感の水準と正比例し、脅威の水準と反比例する」という希望の公式の「希望は、有能感水準と正比例する」の部分は、中学生においても確かめられた。

5. 3つの尺度と問題行動との関係

問題行動に関する項目は6項目あり、それぞれの項目について、「1. 今の学年になってからある」、「2. 前の学年の時にあった」、「3. 2年以上前にあった」、「4. 今まで一度もない」の4つの選択肢をもうけ、あてはまるものすべてに回答してもらった。そのため1～3までの選択肢では、チェックした割合が高いほど望ましくなく、4の選択肢では、チェックした割合が高いほど望ましいということになる。しかし、以下に示す重相関分析では、データの出現率が多い「4. 今まで一度もなかった」という1個の変量を基準変量として、3つのバッテリー尺度の11個の要因を予測変量として用いて分析した。ただし、感情・態度尺度は、感情要因の最初の2項目を「気分」、後の2項目を「熱中」要因に分け、さらに態度要因を4問の中から順に2項目ずつ「判断」と「協調性」の要因にわけた。

Table 4には、3つのバッテリー一尺度の11個の要因と6個の問題行動とその総合計についての相関係数を示した。Table 4の下部の問題行動との相関のみについて1%水準で有意な相関値を太字で示した。

感情・態度尺度では、不登校以外の5つの問題行動において（いじめ3種類、希死念慮、窃盗万引き等の非行）、気分、熱中、判断、協調性の下位要因が少なくとも1個は有意な正の関連を示しているの、これらが良好であると問題行動が少ないといえる。とくに希死念慮は感情・態度の下位4要因とすべて高い.186～.281の相関を示した。すなわち安定した感情や仲間や問題解決に不安のない児童ほど自殺を考えることが少ない。

コンピタンス尺度では、身体(.132)、社会(.182)と自己評価(.175)のコンピタンス要因の高い児童ほど、重度のいじめの被害者となることが少なく、希死念慮や総合した問題行動も少ないといえる。また、社会的コンピタンスが高いほど、軽度のいじめられ経験も少ない(.142)。また、生活コンピタンスが高いほど、いじめ加害の経験(.122)、希死念慮も少なく(.140)、かつ非行経験(.123)が少ない。

不登校は、身体要因(.115)を除いたコンピタンスの4つの要因とは有意な相関はみられない。

希望尺度では、発動性要因のみに有意な相関が見られ、努力や目標達成に希望が高い児童ほど、いじめ加害(.114)、希死念慮(.127)、非行の経験(.121)が少なく、総合的な問題行動(.176)も少ない。

以上に検討したように、不登校については、有意な相関は身体的コンピタンスの1個のみであった。

Tabl 4 11個の予測変量と7個の問題行動（今まで一度もない）との相関行列（中学生）

感情態度				コンピタンス					希望		問題行動						
気分	熱中	判断	協調	認知	身体	社会	生活	評価	通路	発動	不登校	いじめ	軽度	重度	め加害	希死念慮	非行
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

感情態度尺度

1 1.00
 2 .609 1.00
 3 .346 .396 1.00
 4 .294 .252 .230 1.00

コンピタンス尺度

5 .255 .292 .383 .141 1.00
 6 .334 .375 .315 .230 .344 1.00
 7 .333 .296 .295 .303 .358 .459 1.00
 8 .354 .392 .433 .171 .534 .449 .446 1.00
 9 .523 .496 .415 .381 .480 .504 .580 .532 1.00

希望尺度

10 .221 .241 .342 .144 .407 .267 .359 .426 .409 1.00
 11 .324 .360 .383 .168 .440 .327 .338 .565 .509 .450 1.00

問題行動(今まで一度もない)

12-.036 .026 .067-.038 .088 .115 .042 .053 .060-.012 .084 1.00
 13 .081 .094 .099 .181 .025 .076 .142 .018 .113 .049 .050 .077 1.00
 14 .105 .124 .081 .140 .082 .132 .182-.025 .175-.002 .075 .107 .320 1.00
 15 .059 .104 .123 .084 .093 .023 .071 .122 .070 .022 .114 .060 .061 .209 1.00
 16 .232 .281 .186 .245 .189 .201 .158 .140 .310 .005 .127 .118 .179 .276 .209 1.00
 17 .080 .125 .172 .025 .083 .093 .060 .123 .074 .032 .121 .078 .058 .141 .263 .180 1.00
 18 .159 .232 .219 .190 .178 .197 .199 .133 .249 .023 .176 .456 .437 .648 .590 .619 .496 1.00

$r > .096$ なら $p < .01$, $r > .074$ なら $p < .05$ (two-tailed-test). 問題行動部分の太字は, 1%で有意な相関.

また, 問題行動とコンピタンス要因との関係は, 小学生の結果と一部の相違はあるものの大部分は同様な相関係数が得られた.

Table 5 は, 問題行動は「今まで1度もない」という回答を, 基準変量にしたときの重相関分析の結果である. 重相関分析結果を考察するときの判断基準として, ここでは以下のポイントに留意した.

- (1) まず, 予測の精度を示す重相関係数が有意であること.
- (2) Table 5 では, 予測変量の高得点はすべて望ましい方向を指し, また基準変量も問題行動が「今まで1度もない」ことを指標としているので, 反応方向は社会的に望ましい方向を示している. 故に, 標準重み (β -weights) と相関係数 (基準変量との相関) の符号が一致していること (すなわち, 互いに変数の方向性が整合している).
- (3) 予測変量と基準変量の相関係数と標準重みは, いずれも有意であること. ここでは, 少なくとも $p < .05$ 以下となることを基準とした.

以上の観点から, 結果をみていく.

①不登校

これは, 重相関係数が .196 と有意である. 11個の予測要因の中には, コンピタンス要因の認知と身体的要因, および希望の中の発動性要因の計3個が予測に有効であった. すなわち, 認

Tabl 5 感情態度, コンピタンス, 希望による7個の問題行動(今まで一度もない)についての重相関分析

基準変 量	1.不登校		2.重度のいじめ		3.軽度のいじめ		4.いじめ加害者	
	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関
1 気分	-.584**	-.036	-.076*	.081*	-.057	.105**	-.175**	.059
2 熱中	.081*	.026	.201**	.094*	.223**	.124**	.376**	.104**
3 判断	.279**	.067	.282**	.099**	.104**	.081*	.395**	.123**
4 協調	-.342**	-.038	.620**	.181**	.193**	.140**	.335**	.084*
5 認知	.325**	.088*	-.136**	.025	.219**	.082*	.196**	.093*
6 身体	.602**	.115**	.017	.076*	.206**	.132**	-.379**	.023
7 社会	.015**	.042	.511**	.142**	.519**	.182**	.203**	.071
8 生活	-.215**	.053	-.421**	.018	-.845**	-.025	.408**	.122**
9 評価	.213**	.060	.044	.113**	.351**	.175**	-.287**	.070
10 通路	-.483**	-.012	.004	.049	-.326**	-.002	-.395**	.022
11 発動	.424**	.084*	.058	.050	.226**	.075**	.369**	.114**
R=.196 F=276.06** R'=.152								
R=.224 F=364.17** R'=.187								
R=.297 F=666.23** R'=.271								
R=.192 F=265.20** R'=.147								

**p<.01, *p<.05, +<.10, R'=自由度調整済みの重相関係数 Fのdf=10/690

基準変 量	5.希死念慮		6.非行		7.総合	
	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関	予測 標準重み ベクトル	基準変 量との相関
1 気分	.009	.232**	-.057	.080*	-.169**	.159**
2 熱中	.371**	.281**	.335**	.125**	.365**	.232**
3 判断	.123**	.186**	.686**	.172**	.339**	.219**
4 協調	.331**	.245**	-.090*	.025	.248**	.190**
5 認知	.265**	.189**	.008	.083*	.239**	.178**
6 身体	.108**	.201**	.154**	.093*	.160**	.197**
7 社会	-.087*	.158**	.032	.060	.232**	.199**
8 生活	-.146**	.140**	.210**	.123**	-.281**	.133**
9 評価	.541**	.310**	-.282**	.074	.250**	.249**
10 通路	-.407**	.005	-.318**	.032	-.454**	.023
11 発動	-.058	.127**	.341**	.121**	.244**	.176**
R=.406 F=1361.195** R'=.389						
R=.206 F=305.716** R'=.165						
R=.357 F=1007.868** R'=.337						

**p<.01, *p<.05, +<.10, R'=自由度調整済みの重相関係数 Fのdf=10/690

知的, 身体的コンピタンスに自信をもち, 目標を持っている子どもには不登校が少ないと予測される。

②重度のいじめ被害

これは, 重相関が.224と1%水準で有意な精度を示した。感情・態度尺度の熱中(0.201), 判断(0.282), 協調性(0.620)の3要因, コンピタンス尺度の社会(0.511)の1要因の計4個が有効であった。すなわち, これらの要因得点が高いほどいじめられた経験がないといえる。とくに, 協調性, 社会要因が重要である。つまり, 他人との協調性が高く, 友人関係をつくる能力が高い

生徒ほどいじめられることが少ない。

③軽度のいじめ

これは、重相関が.297と1%水準で有意である。感情・態度尺度の熱中(0.223)、判断(.104)、協調性(0.193)の3要因、コンピタンス尺度の認知(.219)、身体(0.206)、社会(0.519)、評価(0.351)の4要因、希望の中の発動性要因の計8要因が有効であった。とくに、社会、自己評価のコンピタンスの2要因が重要である。つまり、友人関係をつくる能力が高く、総合的な自己についての能力評価が高い生徒ほど、軽度のいじめ被害にあうことがないといえる。

④いじめ加害者

これは、重相関が.192で1%水準で有意であった。感情・態度尺度の熱中(0.376)、判断(.395)、協調性(0.335)の3要因、コンピタンス尺度の認知(.196)、生活(0.408)の2要因、希望尺度の発動性要因(.369)1個の計6要因の有効であった。とくに、熱中、判断、生活、発動要因が重要である。つまり、何かに目標があり、それに熱中でき、責任感がある生徒ほどいじめ加害者となることがないといえる。

⑤希死念慮

これは、最も高い重相関の.406を示し、1%水準で有意であった。感情・態度尺度の熱中(0.371)、判断(0.123)、協調性(0.331)の3要因、コンピタンス尺度の認知(0.265)、身体(0.108)、評価(0.541)の3要因の計6要因が有効であった。とくに、自己評価のコンピタンス要因が重要である。つまり、総合的な自己についての能力評価が高い生徒ほど自殺をこれまで考えたことがないといえる。

⑥非行傾向

これは、重相関が.206と1%水準で有意である。感情・態度尺度の熱中(0.335)、判断(0.686)の2要因、コンピタンス尺度の身体(0.154)、生活(0.210)の2要因、希望の中の発動性要因(0.341)の計5要因が有効であった。とくに、判断と発動性の要因が重要である。つまり、生徒のある感情状態での判断が良好で目標を持っている生徒ほど、窃盗、万引きなどの非行傾向が少ない。

⑦問題行動の総合

以上の6個の問題行動を総合したものを基準変量にしたときの重相関係数は.357という有意な相関が得られた($p < .01$)。11個の予測変量の中では、気分、生活、通路という3個の要因のみが有効でなく残りの8個の要因はすべて予測に有効であった。これらの有効な変量の重みの大きさにはあまり差は見られないが、強いて言うならば感情尺度の熱中(0.365)と判断要因(0.339)が相対的に予測に効いていた。

以上の7個の問題行動の指標についての重相関分析結果から言えることは、個々の予測要因が全体で有効とされた個数は、感情尺度で、気分要因0個、熱中と判断要因は6個、協調要因5個、コンピタンス尺度では、認知と身体要因が5個、社会と評価要因が3個、生活要因が1個、希望尺度では、通路要因が1個、発動性要因が5個という結果であった。従って、感情尺度の熱中、判断、コンピタンス尺度の認知、身体要因、そして希望尺度の発動性要因が問題行動の予測に強く関連しているといえる。すなわち、感情的にならず協調的で判断力があり、自己の能力や身体に自信をもち、希望を持っていることもには問題行動が少ない。感情的安定と自分の身体と能力への自信の有無が問題行動の発生と関連しているといえるのである。

問題行動と有能感の関係は、全体的に有能感が高いほど問題行動が少ない。この関係が最もよ

く表れたのは希死念慮経験で、次に軽度のいじめであった。

被験者の中で総合的自己評価の有能感低群の48.4%が軽度のいじめを受けた経験を持ち、58.7%が死にたいと思った経験を持つ。

いじめに関しては、軽度または重度の被害経験と最も強い関連を示したのは社会的コンピタンスで、自己開示性や友好性、協調性を認知できない人ほどいじめられた経験をもつ人が多い。すなわち、仲間が多くなく、社交的でないと思ってる人ほどいじめられやすいといえる。それ故、自分に自信が持てないために総合的自己評価コンピタンスも低くなるのかもしれない。

また、希死念慮と強い関連が見出せたのは、総合的自己評価コンピタンスであった。総合的自己評価コンピタンスの構成成分である愛情、受容、承認は、情緒の安定に関係していることから、自分を受け入れられず、自信を持てない人は情緒が安定せず、不安定な故に死にたいと思う経験が多くなると考えられる。

窃盗、万引きの経験は生活的コンピタンスと最も強い関連があるという結果から、責任感や意志、意欲がない人ほど非行にはしりやすいことが考えられる。

以上の中学生の結果は、小学生の結果と部分的には些細な相違があったが、殆どが同様な結果であった。それ故、小学生と同様に中学生においても、コンピタンスの各種の要因が問題行動の予測に妥当性があるといえる。

要 約

本研究は、コンピタンス尺度の信頼性と妥当性を検討するために行われた。妥当性は、児童の問題行動についての自己報告との関連で検討した。また、有能感尺度と感情・態度尺度、希望尺度との相関の検討も試みた。

被験者は、熊本市の二つの中学校の756名のうち、1年生241名（男子112名、女子129名）、2年生232名（男子126名、女子106名）、3年生228名（男子114名、女子114名）の合計701名の有効回答者を使用した。

有能感尺度は5要因、感情・態度尺度は感情と態度の2要因、希望尺度は通路と発動性の2要因から構成された。これらの尺度についてグループ主軸法で各要因の内的整合性による信頼性係数を算出した。その結果、 α 係数は.618～.847の範囲の高い値が得られた。

主な結果は以下の通り。

- 1) 感情・態度尺度の要因得点と有能感の要因得点との間には強い正の相関があり、全体として有能感が高ければ、感情・態度も望ましい方向にあった。
- 2) 希望尺度の要因得点と有能感の要因得点の間にも強い正の相関があり、有能感が高ければ、希望も高かった。
- 3) 重相関分析法を用いて、3つの尺度の要因を予測要因として問題行動の予測を試みた。その結果、有能感の多くの要因で、有能感が高いほど問題行動の経験が少なかった。

引用文献

- 阿部和彦 1997 子どもの心と問題行動, 日本評論社
- 浦田晴美 1999 中学生のストレスと有能感, 熊本大学大学院教育学研究科修士論文 (未公開).
- Farber, M.L. / 大原健士郎・勝俣映史 (訳) (1977). 自殺の理論. 岩崎学術出版社.
- Harter, S. 1982 The Perceived Competence Scale for Children. *Child Development*, **53**, 89-97.
- Hildreth, H. M. 1946 A battery of feeling and attitude scales for clinical use. *Journal of Clinical Psychology*, **2**, 214-221.
- 勝俣映史 1992 心理臨床における希望と有能感. 熊本大学教育学部心理学科臨床心理学研究室 (未公開資料), 1-20.
- 勝俣映史 1996 クライアントのコンピタンスと心理療法, 熊本大学教育学部紀要, **45**, 人文科学, 259-270.
- 勝俣映史 2000 「生きる力」の概念と構成成分: コンピタンス心理学の視点から, 熊本大学教育実践研究, **17**, 15-21.
- 勝俣映史・篠原弘章 1979 中学生の感情・態度の年間変動, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, **28**, 281-294.
- 勝俣映史・篠原弘章 1980 高校生の感情・態度の年間変動, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, **29**, 323-341.
- 勝俣映史・篠原弘章 2000 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性: 小学生の問題行動との関係, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, **49**, 109-119.
- 篠原弘章・勝俣映史 2000 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性: 小学生の「感情・態度」および「希望」との関係, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, **49**, 93-108.
- Snyder, C.R., Harris, C., Anderson, J.R., Holleran, S. A., Irving, L., M., Sigmon, S.T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C. & Harney, P. 1991 The will and the ways: Development and validation of an individual differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 570-585.
- 託摩武俊 1998 性格心理学ハンドブック, 福村出版, 6-7.
- 松田 惺 1997 青年期の自己形成, 鈴木康平・松田惺 (編) 現代青年心理学, 有斐閣, 58-70.
- 真仁田昭編 1999 いじめ対策ハンドブック 児童心理臨時増刊 716, 金子書房.
- 文部省 2000 文部広報, 平成 12 年 8 月 21 日付.
- 日本子どもを守る会編 1999 子ども白書 1999 年版, 草土文化.
- 総務庁 1999 青少年白書—青少年問題の現状と対策— 総務庁青少年対策本部 (編), 大蔵省印刷局, 16-37.

[謝辞]

本研究のデータの分析に当たっては, 学生の寺本清香さんに大変協力していただきました。また, 調査を快く引き受けてくださったT中学校とO中学校の下城統校長ならびに鬼塚将二校長先生, さらに被験者の皆さんに深く感謝し, ここに記してお礼申し上げます。

*本研究は, 平成 11 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 11610127 代表勝俣映史) によってなされたものであり, 日本教育心理学会第 43 回総会の発表 (2001 年, 於名古屋国際会議場) を加筆したものである。